クオール薬局　１８０秒

「ゼリーのカップ」

○ 薬局、内

待ち合い席の患者、重野（４２）。
子供のようにカップのゼリーをうまそうに食べている。
口についたゼリーを優しくティッシュで拭いてあげる、娘の有加里（６）。
有加里ナレ「わたしのお父さんは、耳が聞こえません。だから私たちはこうしていつもおしゃべりします」
手話で話す有加里と重野。
有加里（手話）「子供みたいに食べないでよ」
重野（手話）「だって今度はグレープフルーツが入ったんだぞ？」
薬剤師村井「重野さん」
有加里、椅子からぴょんと飛び降りて、薬を貰いに行く。薬を受け取り、父に渡す。
重野、立ち上がって村井に会釈。
村井も会釈。

○重野の家、食卓

テーブルの上の薬袋を、嫌そうに見つめる重野。
重野のイメージ。
粉薬を無理矢理飲もうとして、せき込んで全部飛ばしてしまう。

○後日、薬局内、夜

有加里、泣きながら入って来る。
村井　「どうしたの？」
有加里「あー、あー、あー」
その喋り方で、はじめて彼女が聾唖だ

と分る。
村井、カウンターにあった薬袋をメモ用紙がわりに出す。
彼女の文字『たすけて』
村井　「どうしたの？　お父さん？」
彼女の文字『息が止まった』
村井、慌ててカウンターから飛び出す。

○家の外、夜

酸素マスクをつけ、緊急搬送される父を見ながら。
村井　「通報が遅れたら危なかった」
村井、メモで有加里に聞く。
村井の字『薬が効かなかったの？』
有加里の字『ずっと飲んでない』
村井　「なんで？　どうして言わなかったの！」

○イメージ、せき込み、粉薬を飲めない重野

○調剤室、深夜

仲間と協力し、粉薬を飲めるように工夫する村井。錠剤型にしても崩れる。シロップ型にしても分離してしまう。
村井　「あ！」
重野の食べていたゼリーのカップを思い出す。
粉薬をゼリー状に固めることに成功。

○後日、薬局内

待ち合い席で、いつものゼリーを食べ終わった重野。
隣の有加里も食べ終わった。
村井　「重野さん」
と、薬を出す。それはゼリーのカップに入っているゼリー状薬。
有加里、自分のと父のカップを二個持

ってきて、村井のと交換する。

村井　「（微笑む）」

有加里「（微笑む）」

コピー「元気を、調剤いたします。」

クオール薬局ＣＩ。

クオール薬局　１２０秒

「手書きの薬袋」

登場人物
夏美（２５）　新人薬剤師。
中谷（７５）　厳しい会社役員の患者。
奥さん（７５）　中谷の奥さん。

○薬局内、カウンター

夏美（２５）の出した薬袋。
手書きの「７」の数字が読みにくい。
患者の中谷（７５）、思わず説教。

中谷　「７は１と間違うから、横線を引け」
ボールペンを取って書きこむ。

中谷　「７千万と１千万じゃえらい違いだろ。
手書き伝票の時代ならクビだ」

夏美　「はい。…すみません」
大きな袋のアミノレバンを出す。

夏美　「毎食後にこれを、水２００ミリリッ
トルに溶かしてください」
さらにその３×６倍を、手提げ袋に入
れて出す。

夏美　「七日分出しておきます。ご希望の抹
茶フレーバーでご用意しましたが、なにせ
苦いお薬で…」

中谷　「十分だ」
薬を提げ、つかつかと出てゆく。

○後日、同

電話で話す夏美。

夏美　「入院？　まさか、悪化したんですか？
アミノレバンが効かなかった…？」

電話の相手の奥さん（７５）「いいえ。ごめん
なさい。実は、おくすりを飲んでなかった
ようなんです」

夏美　「飲んでなかった？…」

○中谷の自宅（回想）

一週間分の薬を並べる中谷。
水で溶いてコップで飲むが、顔をしかめる。
昼に二杯目を飲み、また顔をしかめる。
夜はコップを前に動かない。あと３×６包残っている。

○（元に戻り）薬局内

病院薬局に電話する夏美。
病院薬剤師「〇〇も△△も効き目がなくて、先生はアミノレバンに戻したようです。今は点滴で直接体に入れていますが…」
夏美　「退院なされたら、自力で飲み続けなきゃいけない」
病院薬剤師「ええ」

○中谷の自宅、ベッド

タイトル「一か月後」
中谷「あー。あー」
言葉もまだ出ず、要介護状態。奥さんがおかゆを食べさせてあげている。

○薬局内、カウンター

奥さん「脳に毒素が行くまで我慢してたみたいで、立つことも字を書くことも、言葉すらまだもつれるんです」
夏美、手書きの手紙を見せる。
夏美　「ゼリー状にしたら毎日飲めたんじゃないかと思って、レシピをつくりました」
奥の調剤室から、ボウルに入れたり製氷器に入れたりした何色ものゼリーを見せる薬剤師たち。
薬袋には、手書きで「パイナップル味

とヨーグルト味が美味しいです！」と。

○後日、薬局カウンター

奥さんが微笑んで夏美に薬袋を。
裏面には、必死に書いたつたない字で、
中谷からの返信が。

中谷の字「字がかけるようになった。ありがとう。ありがとう。ありがとう」
表をひっくりかえすと、夏美の書いた「7」の字（横線入り）にツッコミ。

中谷の字「よろしい」
思わず笑ってしまう夏美。

夏美ナレ「私たちの仕事は、月に何回か訪れる方々と、出来るだけコミュニケーションをとることです。ここも、医療の現場だから」

コピー「医療の現場が、ここにもあります。
クオール薬局」

クオール薬局　１８０秒？

「二枚のカルテ」

※ 以下、なるべく台詞の少ない劇にして、音楽で心情を語るものにしたい。

○ 薬局、内

金曜日を示す卓上時計。
カウンターで薬を出す、薬剤師村井（３０）。
受け取る患者、佳澄（２７）。
彼女の美しさに見とれる村井。
視線に気づく佳澄。村井あわてて、

村井　「お、おだいじに」

○次の金曜、薬局、内

そわそわして待っている村井。
佳澄が入って来る。
せき込みながらカルテを渡す彼女。
村井、調剤室からガラス越しに彼女を心配する。

○花屋の前

小さくてかわいい花を見つける村井。

○別の日、薬局、内〜外

カウンターの小さな花瓶に、花を活けた村井。
と、外に佳澄が歩くのを見つける。

村井　「？」

彼女はいつもと別の方向へ。
思わず追うと、彼女の向かう先は歯医者（たとえば歯の形のオブジェ）。

○金曜、薬局、内

花を替えて待っている村井。
やって来る彼女。マスクをして、重い咳をしている。
カルテを渡す彼女。薬の種類が増えている。

○調剤室

カルテを見ながら薬を出す村井。
ふと、手が止まり、待つ彼女に。
村井　「もう一枚のカルテ、見せてください」
佳澄　「？」
村井　「歯医者さんに、通われてますよね？」
二枚のカルテを突き合わせる。
それぞれの薬の組み合わせを指さして確認。
あわてて、調剤室のテーブルに置いた薬を払いのける。薬辞典（？）を出す。
電話する村井。医院に確認を取り、メモし、薬を調合しなおす。

○同、カウンター

その新しい薬を出す。
村井　「一緒に飲むと、調子が悪くなる薬があるんです。食べ合わせみたいなもので」
佳澄　「…そうなんですか」

○金曜、薬局内、夜

カウンターの花はしおれている。
来ない彼女を待つ村井。

○後日、花屋の前

花を買おうか迷っている村井。
と、彼氏を連れた佳澄が。
佳澄　「あ、先日はありがとうございました。

おかげで、治ったみたいです」
深々とおじぎする佳澄。
村井　「それはそれは…。…あの…」
佳澄　「？」
村井　「…おめでとうございます」
微笑み、彼氏と腕を組んで去る彼女。

○薬局内、深夜

二枚のカルテをシュレッダーする（ケースクローズドの箱に入れる？）村井。
うれしくも、苦しくもある。

コピー「私たちの仕事は、二度とここへ来ないようにすることです。」

クオール薬局ＣＩ。